国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院（NCGM）
エイズ治療・研究開発センター（ACC）

ACC NEWS LETTER

01
創刊号
JUNE
2024

Director's message

2024年度スタートに寄せて

ACC センター長 / 医師　潟永 博之

エイズ治療・研究開発センター（ACC）は、薬害エイズ訴訟の和解をふまえ、被害救済の一環として 1997 年 4 月 1 日、国立国際医療センター病院（当時）に開設されました。構成は、臨床研究開発部のもと、専門外来、病棟、医療情報室、治療研究開発室の 4 部門からなっております。また、薬害 HIV 感染者に対する被害救済を一層強化するため、2011 年 7 月より救済医療室を併設し、ACC のみならず院内外の様々な診療科の先生方にもご参画いただいております。

ACC の第一の任務は、HIV 感染者に対する包括的な診療を行い、予後の改善と長期にわたる患者の社会生活をサポートすることにあります。抗 HIV 療法の著しい進歩と総合医療・全身医療を基盤とする国立国際医療研究センター病院の全科対応に助けられ、ACC を受診する患者の予後・生活の質は劇的に改善しております。2024 年 3 月末までに ACC を受診した HIV 感染者は 5,400 人を超えました。この豊富な経験を生かして、ブロック拠点病院、中核拠点病院、拠点病院を通じて全国の HIV 診療のレベルアップ・均霑化を行うのも重要な責務であります。このため、医療従事者を対象とした数多くの研修活動を行っております。また、先進的な診療を実践・提供するのも大きな任務であり、感染者一人一人に応じた最適な治療法を開発するために臨床研究や多施設共同臨床試験なども積極的に行っております。世界規模で考えれば、HIV 感染症 / エイズはむしろ途上国で大きな問題となっています。このため、ACC の活動は国内にとどまらず、HIV 感染者の多い途上国、特にアジアの国々との共同研究なども行い、国際貢献を果たしております。

また、次世代に HIV を残さないための取り組みとして、新規感染者ゼロを目指した予防活動も行っております。現在、日本での感染は男性同性愛者（MSM）が中心となっています。HIV に感染していない MSM のための Sexual Health 外来を開設し、他の性感染症も含めた予防活動にも力を入れています。

このように、ACC では、豊富な症例数、臨床研究、国際協力などを通じ、感染症全般を学ぶことが可能で、現在多くの若手医師が集まり切磋琢磨しております。HIV 診療を通じて、広い視野を持った世界に通用する若手感染症専門医が育成され、感染症診療全体の底上げにつながることは、私たちの大きな喜びでもあります。HIV 感染症が、医療分野にとどまらず、社会的にも、政治的にも、大きな問題であることは紛れもない事実です。ACC 一同、この大きな難題に正面から対峙する所存でございます。皆様からの幅広いご助言、ご支援を賜れれば幸いです。

2024 年 4 月に新たに就任した 2 人とともに。潟永博之 ACC センター長（中央）、上村悠 ACC 救済医療室長（左）、中本貴人 ACC 専門外来医長（右）

専門外来からのご挨拶

中本 貴人
専門外来医長 / 医師

この度、2024年4月からエイズ治療・研究開発センター（ACC）の専門外来医長を拝命いたしました中本貴人と申します。ACCは薬害エイズ訴訟の和解を踏まえた恒久対策の一環として1997年に開設されました。その目的の一つは、HIV感染症に関する最新の高度な診療を提供することで、これまでの諸先輩方のご尽力により、薬害HIV患者だけでなく、多くのHIV感染者を診療し、2022年末時点で5200名を超える患者を診療してきた実績がございます。そのACCの一部門である専門外来の医長という職務の重責に、身が引き締まる思いです。

私は、小児科医師、感染症科医師として臨床の道を歩んでいましたが、HIV感染者に対してより高度な診療を提供できるようになるため、2021年からACCでの勤務を開始しました。ACCでは豊富な臨床経験が得られるだけでなく、これまでACCの諸先輩方が積み上げてこられたエビデンスも学べ、多くの困難に立ち向かってこられた薬害エイズ患者の皆様の思いや信念に触れ、様々なスティグマに悩みながらも立ち向かっているHIV患者の皆様の姿勢を目にし、医学的なことだけでなく社会的、人間的にも成長してきました。まだまだ学びは止まらないですが、これからは私が諸先輩方から受けたように、自分が得た学びを後進達にも伝えながら、皆様によりよいHIV診療を提供できるよう努力する所存です。

HIV診療は日々進歩しており、現在は1日1回1錠の内服薬や1～2か月毎の注射薬でコントロール可能な慢性疾患となっています。そのため、HIV患者における大きな医学的課題は、メンタルヘルス、生活習慣病からの心血管疾患、非AIDS関連悪性疾患となっています。したがって日々の診療において様々な予防啓発や早期発見、早期治療提案が重要です。ACCでは医師や看護師だけでなく、豊富な経験を有するHIVコーディネーターナース、薬剤師、臨床心理士、歯科衛生士、メディカルソーシャルワーカーといった多職種が在籍しており、HIV患者の皆様を360度、全方向からサポートする体制が整っています。この患者中心のチームがACCの最大の強みの一つです。さらに、当院には様々な高度専門医療を提供できる医師が数多く在籍している総合病院であり、上記疾患に対応できる体制が整っています。ACCチーム、NCGMチームとして受診されている患者の皆様には、心身ともに健康を維持していただき、その経験を全国のHIV診療のレベルアップ・均てん化に生かしていければと考えております。

ACCでは若輩者ではありますが、患者の皆様だけでなく、一緒に勤務するACC、NCGMの皆様も笑顔になれるような外来を目指すよう努力いたします。

救済医療室からのご挨拶

上村 悠
救済医療室長 / 医師

2024年4月1日より救済医療室長を拝命しました上村悠です。全ての被害者とご家族、ご遺族に心より敬意を表します。また、私たちの薬害エイズ被害者救済医療の活動にご支援を頂いております皆様に深く感謝を申し上げます。

私は、2009年より長野県で医師として初期臨床研修を開始しました。ACCに救済医療室が設置された翌年の2012年に国立国際医療研究センターで感染症診療研修を開始し、2015年よりACCに所属しています。学生の頃にHIV感染症について学ぶ機会はありましたが、初期研修ではHIV感染症の方を診療する機会はなく、国立国際医療研究センターで一からHIV診療を学びました。薬害HIV感染者の診療についても同様で、先輩の医療者たちから1980年代の日本におけるエイズパニックの頃のHIV診療の様子、HIV感染症、血友病の診療がどの様に進歩してきたか、薬害エイズ事件から受けた教訓をどの様に日々の行動に生かすべきか、教えを受けてきました。

1996年の薬害エイズ訴訟の和解、そして1997年のエイズ治療・研究開発センター設立から四半世紀が経過しました。この間、医学上の進歩は目覚ましいものがあります。抗HIV療法はより高いウイルス抑制効果を得られる様になりました。血友病の治療については、長期作用型の薬の登場により定期補充療法の普及が加速し、近年では皮下注射による治療も開発され、治療の選択肢が広がっています。C型肝炎は、新たに開発された直接作用型抗ウイルス薬により、高い確率で治癒することが可能となりました。

医学は進歩をしている一方で、新たな課題もでてきました。高齢化に伴い生活習慣病や悪性疾患のリスクが増えています。肝硬変の方などでは、C型肝炎ウイルスの排除後であっても、肝癌を発症するリスクは残り、注意が必要です。血友病については、関節症の進行、そして療養環境の確保など、懸念すべき課題が多数残されています。薬害被害者が直面している課題は、同時に日本の医療にとっても重要な課題となります。私たちは、今この時代に直面する課題について正しい情報を収集し、どの様に対処するべきかを検討し、発信をします。

全ての皆様が最良の医療を受け、安心安全な生活を送るために、当事者である皆様の声を大切に、全国の医療者・関係者と共に患者参加型医療、薬害エイズ被害者救済に取り組んでまいります。お力添え頂けますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

知っていますか？
身体の健康にも大切な「お口の健康」

最新号

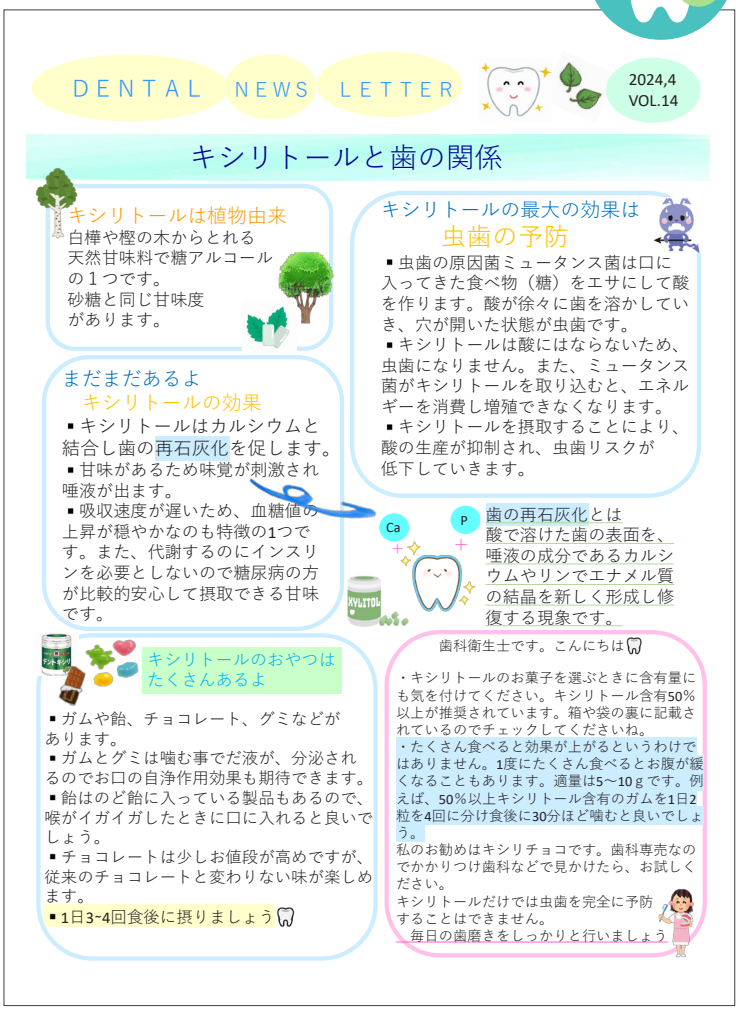
ACC には歯科衛生士がいます。皆様のお口の中の健康向上を目的として、歯周病や虫歯の予防に大切な歯磨きの方法をお伝えしたり、一緒に練習をしたりしています。

また、歯科に受診したくてもどの歯医者に行ったらいいのか困ってしまう、歯科に受診しているけど治療がよくわからないなど、歯科に関するご相談もお聞きしています。

口腔の健康は、全身の健康維持にとても重要です。ACC では、患者さん向けに少しでもお役立ていただけるような内容をニュースレターとしてご紹介しております。ACC のウェブサイトでいつでもご覧いただけます。

歯科治療については、エイズ治療拠点病院の歯科以外でも HIV 陽性患者の協力歯科医療機関が展開されています。協力医のネットワークリストをもとに患者さんに合った歯科医療機関のご紹介をしております。

また、HIV 感染症の診療・実務を担う医療者の育成と全国的ネットワークの構築を目的に ACC 研修を行っています。研修コースの一つに、歯科医療従事者コースを設置しており、HIV 感染症診療に携わる歯科医療従事者を対象に HIV 感染症に関する支援方法、歯科診療時に必要な知識を学ぶことが出来ます。



DENTAL NEWS LETTER

2024,4
VOL.14

キシリトールと歯の関係

キシリトールは植物由来

白樺や樫の木からとれる天然甘味料で糖アルコールの１つです。
砂糖と同じ甘味度があります。

キシリトールの最大の効果は 虫歯の予防

▪ 虫歯の原因菌ミュータンス菌は口に入ってきた食べ物（糖）をエサにして酸を作ります。酸が徐々に歯を溶かしていき、穴が開いた状態が虫歯です。
▪ キシリトールは酸にはならないため、虫歯になりません。また、ミュータンス菌がキシリトールを取り込むと、エネルギーを消費し増殖できなくなります。
▪ キシリトールを摂取することにより、酸の生産が抑制され、虫歯リスクが低下していきます。

まだまだあるよ キシリトールの効果

▪ キシリトールはカルシウムと結合し歯の再石灰化を促します。
▪ 甘味があるため味覚が刺激され唾液が出ます。
▪ 吸収速度が遅いため、血糖値の上昇が穏やかなのも特徴の1つです。また、代謝するのにインスリンを必要としないので糖尿病の方が比較的安心して摂取できる甘味です。

Ca P

歯の再石灰化とは
酸で溶けた歯の表面を、唾液の成分であるカルシウムやリンでエナメル質の結晶を新しく形成し修復する現象です。

キシリトールのおやつはたくさんあるよ

▪ ガムや飴、チョコレート、グミなどがあります。
▪ ガムとグミは噛む事でだ液が、分泌されるのでお口の自浄作用効果も期待できます。
▪ 飴はのど飴に入っている製品もあるので、喉がイガイガしたときに口に入れると良いでしょう。
▪ チョコレートは少しお値段が高めですが、従来のチョコレートと変わりない味が楽しめます。
▪ 1日3~4回食後に摂りましょう

歯科衛生士です。こんにちは

・キシリトールのお菓子を選ぶときに含有量にも気を付けてください。キシリトール含有50%以上が推奨されています。箱や袋の裏に記載されているのでチェックしてくださいね。
・たくさん食べると効果が上がるというわけではありません。1度にたくさん食べるとお腹が緩くなることもあります。適量は5～10 g です。例えば、50%以上キシリトール含有のガムを1日2粒を4回に分け食後に30分ほど噛むと良いでしょう。
私のお勧めはキシリチョコです。歯科専売なのでかかりつけ歯科などで見かけたら、お試しください。
キシリトールだけでは虫歯を完全に予防することはできません。
毎日の歯磨きをしっかりと行いましょう

【DENTAL NEWS LETTER バックナンバー】

Vol. 1 ｜歯周病ってどんな病気？
Vol. 2 ｜歯と歯の間のお手入れや基本的なブラッシング方法など
Vol. 3 ｜手指用歯ブラシのご紹介
Vol. 4 ｜歯と歯の間のお掃除　デンタルフロスや歯間ブラシ
Vol. 5 ｜どうして虫歯はできるのかな？
Vol. 6 ｜唾液のお仕事
Vol. 7 ｜電動歯ブラシを使った事はありますか？
Vol. 8 ｜口内フローラをご存知ですか？
Vol. 9 ｜タバコとお口の健康
Vol. 10 ｜歯ブラシの交換はしていますか？
Vol. 11 ｜オーラルフレイル
Vol. 12 ｜歯科受診で困ったことはないですか？
Vol. 13 ｜ワンタフトブラシをご存知ですか？

イベント・レポート

ACC パネル展 2023
「エイズ対策における市民団体の役割」

2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日）、国立国際医療研究センター（NCGM）病院の中央棟地下 1 階アトリウムにて、ACC パネル展「エイズ対策における市民団体の役割」を開催しました。

ACC パネル展は、HIV/ エイズや薬害エイズ事件、ACC の取り組みなどについて、NCGM を訪れる多くの人々に広くご理解いただくことを目的に、毎年 1 回、様々なテーマで開催しています。

NCGM 中央棟のアトリウムのステージに並んだ 6 枚のパネル

2023 年のパネル展テーマは、「エイズ対策における市民団体の役割」。この年の UNAIDS の世界エイズデーで掲げられたメッセージ「Let Communities Lead（コミュニティ主導でいこう）」に沿ったものです。

市民団体の役割と ACC との連携を伝えるパネル

パネルは3つのコンテンツによる6枚で構成しました。

1 つ目は、「スペシャルトークセッション　ACC x 市民団体　コミュニティ視点でつなげる―地域・ひと・医療」です。ACC と連携している市民団体として、はばたき福祉事業団、akta、ぷれいす東京の 3 つの団体の代表を迎えて、ACC の田沼順子医師が HIV 治療・予防における市民団体の役割や市民参画の意義、これからの ACC との連携のあり方などについて対談した内容をお届けしました。

2 つ目は、田沼医師のスペシャルインタビュー「コミュニティとともに HIV の流行を終わらせる― ACC の患者参加型医療がめざすもの」。HIV/ エイズ分野における市民参画の歩みや、ACC が提供する患者参加型医療のあり方、コミュニティとの関わりなどについて、田沼医師が語った内容をお伝えしました。

3 つ目は、「HIV 治療と ACC の歴史」です。1981 年に初めて米国で患者さんが報告されてから 2023 年までの HIV 治療と ACC 設立からの歩みを年表にして、大きなパネルで振り返りました。

2030 年のエイズ流行終結の目標に向けて

展示期間中は、アトリウムの休憩スペースで過ごされる方を中心に、多くの人にパネルを鑑賞いただきました。HIV 予防啓発のリーフレットの配布も行いました。

2030 年のエイズ流行終結の目標を達成するためには、患者さんや市民団体の協力なくしては達成し得ません。ACC は、これからも患者さん中心の医療であることを大切にし、それぞれの視点を知りながら取り組むべきことを引き続き追求してまいります。

HIV 予防啓発のポスターと配布したリーフレット

展示内容は ACC 公式サイトでご覧いただけます

市民団体との対談や ACC 医師のインタビューなど、パネルの全コンテンツを公式サイトの下記ページで公開中です。ぜひご覧ください。

エイズ治療・研究開発センター　Web サイト
TOPICS「2023 年パネル展『エイズ対策における市民団体の役割』」
https://www.acc.ncgm.go.jp/accrepo/topics/20231201.html